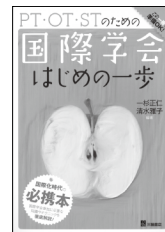


一杉正仁, 清水雅子 (編著)

PT・OT・STのための 国際学会はじめの一步

菊池 恵美子

(帝京平成大学, 作業療法士)



いささか古い話で恐縮だが、私が初めて国際会議の場に出かけたのは1965年(昭和40年)、第3回汎太平洋リハビリテーション会議が東京で開催されたときのことである。そのときはまだ国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院・作業療法学部2年生であった。その機会は、初代学院長の故・砂原茂一先生とTali Conine学部長の、“学生の間に国際会議を見ておくことは大切”との判断によって得られたものであった。当時は何も考えず、ただ休講になることが嬉しかったと記憶しているが、会場で思わぬ失敗をした。マナー違反である。しかも、そんなつもりはまったくなかった(!)のに……。

さて、本書を手にして3つのことを感じた。まず装丁の親しみやすさ、内容のわかりやすさ、そしてその実学性の高さ、である。

本書は、Part1のⅠ～Ⅲ章とPart2のⅠ～Ⅳ章、そして付録1, 2で構成されている。

Part1の「国際学会に参加しよう!」Ⅰ章には、「英語の文化を理解する」意味が書かれている。語彙は異文化を表す、英語の言語構造は5文型(そうだった!)等、

初めての国際学会を控えた準備としてはもとより、“そういえばこれもあった、あれも経験した”と回想するもまた楽し、である。研究倫理に関するキーワードとキーワード(英語)は新たに学ぶことができた。Ⅱ章の「国際学会のルール」では、特に後半の「英語論文の読み方」、「タイトルの付け方」、および具体例に基づく「抄録の書き方」がわかりやすく実用性に富む内容である。養成校の教員や大学院生はもとより、学部生の「研究法」の講義でも使いたい。

学生にとって日本語では難しいと感じる研究の基礎的事項も、疑問文や強調文以外は基本的に主語(S)に動詞(V)が続く構文で表現されていることで、趣旨が明確になり内容がストレートに伝わるからである。

Part2の「医学・福祉に関する基本情報」Ⅰ章には、わが国の医療や福祉に関する基本情報がまとめられている。少子高齢化、生活習慣病他のテーマは、国際学会で日本を紹介するときの知識の引き出しとなろう。ここはあえて日本語で書かれていることから、多様な国籍の人々と交流する際には、まず自国のことを知ることが重要

であるとの著者からのメッセージと拝察している。

またⅡ章「知っておくべき傷病」、Ⅲ章「人体の構造と動き」は、卒後の医学用語のブラッシュアップ!を可能にしてくれるだけではなく、学部初年次生の教材としても使えそうである。最後の、付録1「医療で用いる英単語、スペルの規則」、および付録2「数字の読み方」は、まさに国際化時代(日英両語で検索できる機能:文部科学省)に対応する内容といえよう。

ところで、冒頭でふれた私の犯したマナー違反、当時はまだ日本・米国どちらにも占領下の意識が濃い時代のことである。今であれば多分、誰も気にしないのではと(勝手に)思っている。しかし、“How impolite!”の声を忘れたわけではない。あのとき、とっさに一言、“Excuse me”と言えればよかったのであろう。

若いOT諸氏には、本書を片手に世界中の多くの学会に出かけてほしいと思う。

B5判 168頁 3,200円+税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357